

# 2014 年度

## 授業改善アンケート実施報告

### <現状と課題>

- ・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて  
黒田 茂（基礎ゼミナール部会長、都市教養学部理工学系 教授）
- ・情報リテラシー実践 I での授業改善アンケートの結果と FD の取り組み  
永井 正洋（情報教育検討部会部会長、大学教育センター 教授）
- ・実践英語教育 授業改善アンケート結果の検討とこれからの課題  
本間 猛（英語教育分科会座長、都市教養学部人文・社会系 教授）
- ・未修言語の授業改善アンケートについて  
山本 潤（未修言語科目部会長、都市教養学部人文・社会系 准教授）
- ・理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果について その現状とアンケートの活用方法  
林 文男（理工学系 FD 委員会委員長、都市教養学部理工学系 教授）
- ・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて  
高岸 冬詩（教養・基盤科目群検討部会長、都市教養学部人文・社会系 教授）

# 基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

基礎ゼミナール部会長  
都市教養学部理工学系数理科学コース准教授  
黒田 茂

## 【はじめに】

「基礎ゼミナール」は、新入生を対象とした演習形式の必修授業である。1クラスの定員は22名であり、希望者多数の場合は抽選となる。例年約80クラスが開講され、以下の三つの共通の目標の下、各担当教員がそれぞれの専門性を活かしたテーマを設定する。

- ・「自ら学び、考え、行動する」という能動的な学習姿勢を身につける。
- ・「調査し、まとめ、発表（表現）し、討論する」ための基本的な技術・能力を修得する。
- ・グループ討論や共同調査を通じて、豊かな人間関係を形成するために必要な力を身に付ける。

## 【個別の質問項目】

基礎ゼミナールの三つの個別質問項目（問8～10）は、それぞれ上記「共通の目標」に対応した内容であり、目標の達成度を確認することを意図している。前回、質問項目を大幅に変更したばかりなので、今回は前回と同じ質問内容でアンケートを実施した。

個別質問項目のアンケート結果の平均値はいずれも4.00を超えており、個々の数値を見る限りいずれも高い水準にあるといえる。一方、三つの質問項目の間では若干の差が見られ、この傾向は昨年度からほとんど変わっていない。前回と今回どちらも平均値が最も低いのが問10だが、逆に5の割合が最も高いのも問10

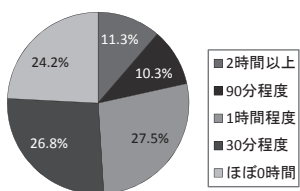
〈実施期間〉 平成26年7月9日(水)～平成26年7月22日(火)  
 〈履修登録者数〉 1,653人 〈回答者数〉 1,282人 〈回収率〉 77.6%  
 〈授業科目数〉 80クラス 〈実施科目数〉 66クラス 〈実施率〉 82.5%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	4.03	1.00		38.4%	36.9%	17.1%	4.9%	2.7%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	4.07	0.86		32.6%	47.8%	14.7%	3.6%	1.3%
問8 この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組み姿勢の重要性を認識した。	4.12	0.88		37.6%	43.3%	15.1%	2.2%	1.9%
問9 この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた。	4.02	0.90		31.5%	47.1%	15.8%	3.3%	2.3%
問10 グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた。	4.02	1.03		38.1%	37.5%	16.3%	4.3%	3.8%

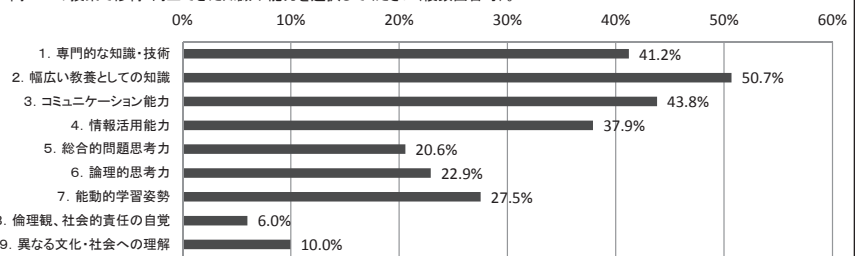
データ数=1,282

■5. そう思う ■4. ややそう思う ■3. どちらでもない ■2. あまりそう思わない ■1. そう思わない

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。）



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



である。基礎ゼミナールは学生の希望に基づいてクラス編成を行うため、まれに同じクラスに同じ所属の学生が多く配属される場合もあり、そうした学生が否定的な回答をした可能性も考えられる。質問の仕方を変えると異なる結果が出るかもしれない。5と回答した学生が多い理由として、グループワークや、他の学生と関わる活動に対する高評価が考えられる。実際、学生アンケートの自由記述を見ても、そうした活動に対する肯定的な意見が非常に多いのが目を引く。問10と同様に平均値が低いのが問9で、個別質問項目の中では5の割合が最も小さく、4の割合が最も大きい。要するに、「自己表現能力」を向上させることができたと言言できるほどではないが、多少はできたと思う、という結果である。半期の授業で能力向上を実感できるまで到達するのはなかなか難しいかもしれないが、改善の余地もあるかもしれない。個別質問項目の中では問8の結果が最も良く、5と4を合わせた割合が80パーセントを超え、1と2を合わせた割合が他の二項目に比べて小さいのも印象的である。学生が主体的に課題に取り組む形式の授業がうまく機能していることが伺える。これは、ひとえに担当教員の努力の賜物である。

### 【共通の質問項目】

問1、問2とも平均値は4.00を超え、いずれも高い水準にある。それを踏まえた上で各項目について詳しく見ると、問1は5の割合が高いものの、1や2の割合も他の質問項目に比べて高めである。基礎ゼミナールの場合、80クラスもある中から第5希望まで決める必要があり、学生がクラスを選択する上でシラバスの果たす役割は非常に大きい。そのことは、基礎ゼミナール担当予定教員に周知されており、シラバスの内容は年々充実してきている。一方、学生アンケートの自由記述には、シラバスから期待された内容と異なっていたという意見や、課題についてシラバスに明記しておいて欲しいという意見など、シラバスに関するものもいくつか見られた。基礎ゼミナールにおけるシラバスの重要性は、今後も引き続き丁寧に説明していく必要がある。問2は「理解度」に関するもので、5に比べて4の割合が大きい点が特徴的であり、この傾向は昨年度も同様である。そもそも、基礎ゼミナールは講義形式の授業でないため、理解度を測るのは難しいという面もあるかもしれないが、学生アンケートの自由記述には、教員からの専門家としてのアドバイスも欲し

かった等の意見も見られた。学生は主体的活動に満足している半面、教員によるフォローも求めているようであり、うまくバランスをとることが肝要なようである。問3は授業時間以外の学習時間に関するもので、クラスごとにばらつきがあることが伺える。昨年度も似たような結果だったが、今回の方が学習時間は全体的にやや増加している。問4で目を引くのは、第7項目の「能動的学習姿勢」を選択した学生の割合が、第1～4項目に比べてさほど高くない点である。内容的には高評価を得た問8とほとんど同じだが、「重要性を認識」することと、実際に「修得・向上」させることは別ということだろうか。なお、昨年度は第2、3項目を選択した割合が突出しているのは同じだが、第1、4、7項目は同程度（30~35パーセント程度）選択されている。

### 【おわりに】

学生アンケートの自由記述は1,122件あり、その内訳は「良かった点」（問5）が695件、「改善して欲しい点」（問6）が231件、「その他」（問7）が196件である。「その他」の中にも「楽しかった」等の肯定的な感想が多数含まれており、基礎ゼミナールに対する学生の満足度が非常に高いことが窺える。経年変化を見ても、全体的に学生アンケートの結果は年々改善する傾向にある。これは、基礎ゼミナール担当者の授業改善への意志が数値として表れたものといえるだろう。実際、教員アンケートでも色々な改善例が報告されている。また、学生アンケートの結果に関わらず、前回の反省をもとに様々な工夫を行っているという話は、私の周囲でもよく耳にする。そうした教員たちの努力により、新規担当教員が参考にすることのできる実施例やノウハウが蓄積されてきたことも、アンケート結果の改善に大きく寄与していると思われる。現在の水準を維持し、さらなる向上を図るためにも、新旧交えた基礎ゼミナール担当者同士の情報交換は重要であり、今後も「基礎ゼミナール懇談会」のような取り組みを継続していくことは大変有意義と考えられる。

# 情報リテラシー実践 I での授業改善アンケートの結果と FD の取り組み

情報教育検討部会部会長  
 大学教育センター教授  
 永井 正洋

## 【はじめに】

情報リテラシー実践 I は、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。近年、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践 I A(表計算ソフトを利用した統計処理) という科目も開設した。現在は、これら 2 科目のうち 1 科目を選択必修として、学部・系・コースが指定している。

本稿では、2014 年度の前期末に行った FD 委員会実施の情報リテラシー実践 I についての授業改善アンケートの結果と、情報教育検討部会が行った授業評価アンケートの結果について報告する。また、本年度からは FD の新しい取り組みとして反転授業も始めてお

り、それについてもまとめた。

## 【授業評価の方法】

授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問 1～4、個別質問項目が問 8～10 となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。

## 【2014 年度】

実施時期：2014 年 7 月 9 日～7 月 22 日

対象：首都大学東京 情リテ I 受講者

回収人数/全人数：1,204 人/1,654 人 (72.8%)

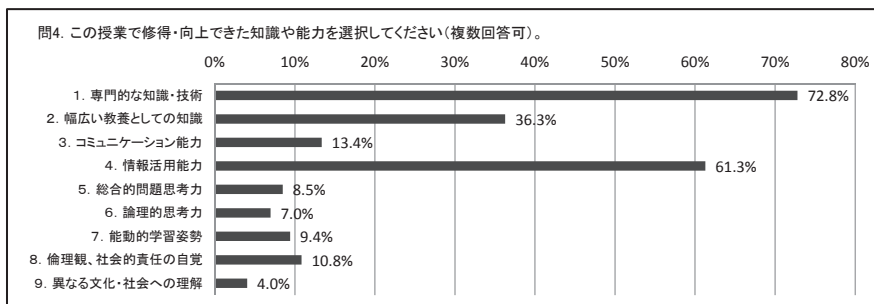
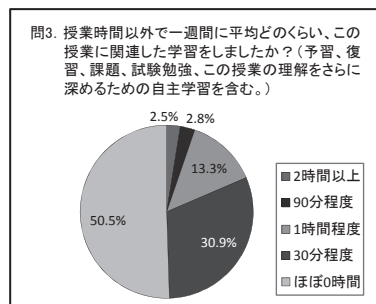
方法：BlackBoard (33 クラス / 39 クラス)

〈実施期間〉 平成26年7月9日(水)～平成26年7月22日(火)  
 〈履修登録者数〉 1,654人 〈回答者数〉 1,204人 〈回収率〉 72.8%  
 〈授業科目数〉 39クラス 〈実施科目数〉 33クラス 〈実施率〉 84.6%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.58	1.15		25.8%	28.0%	31.6%	7.8%	6.7%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.80	1.00		22.9%	49.4%	16.6%	6.9%	4.2%
問8 私はこの授業を受講して満足した。	3.98	1.07		37.2%	36.8%	17.6%	3.5%	5.0%
問9 授業全体を振り返って、この授業はあなたにとって難しかった。	3.29	1.10	12.8%	32.9%	31.8%	15.2%	7.3%	
問10 チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。	4.18	0.97		47.6%	30.1%	17.1%	2.7%	2.4%

データ数 = 1,204

■5. そう思う ■4. ややそう思う ■3. どちらでもない ■2. あまりそう思わない ■1. そう思わない



## 【結果と考察】

問1～10は、FD委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問8（満足度）からは、74.0%の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問9（難易度）に関しては、現在の学習内容を22.5%の学生が容易だと思うのに対して、45.7%の学生が難しいと思っており、例えば、情報リテラシー実践Ⅰの学習内容をより専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問3（授業外学習時間）からは、授業以外での学習時間について、30分未満の学生が81.4%いることが示されており、本科目の抱える問題といえる。前年度が75.3%であったこともあり、今後、注視していく必要がある。最後に、問4（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが分かるが、現在、情報倫理の育成に関して要請の多いことを勘案すると、「8. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目を今後、更に伸ばしていく必要があると考えられる（H25=9.2% → H26=10.8%）。

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図1）に関して報告する。これら4つの質問項目からは、学生の79.4%が、情報リテラシーが身についたと回答すると共に、71.5%が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、約75%の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に満足していることが分かる。

以上、まとめると、概ね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身についたと認識している。更に、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。このような傾向は、ここ5年以上続いており、情報リテラシー実践Ⅰのカリキュラムが、継続かつ安定して学習者に評価及び支持されていると考えられる。

反面、課題となる側面としては、授業内容をどちらかという難しいと感じている学生が多くいると共に、授業外での学習時間が不足していることがあげられる。特に学習時間が十分でない点に関しては、単位の実質化の観点からも問題となる。本年度は、主体的な学習を促すようなeラーニングコンテンツの開発を行い授業前の予習として位置づけ、反転授業を構成するなどして改善を目指す取り組みを以下のように始めた。

## 【反転授業の取り組み】

本年度から情報リテラシー実践Ⅰでは、反転授業を新しいFDの取り組みとして試行的に実践している。本科目は同じ部局の初年次学生を複数のクラスに分けて指導する形態を取っているが、1クラスを実験群として反転授業を、別の1クラスを統制群として従前授業をそれぞれ実施し比較検証した。知識の習得を小テストによって事前・事後に測定した結果、両群とも事後成績が有意に向上した。更に、実験群は成績中位者の向上が特徴的にみられたが群間に有意な差は認められていない。一方、事後に実施した意識調査からは、授業前の予習が授業内容の理解や課題に取り組むことに役立つほか、授業に積極的に取り組む契機になることが示され、反転授業が受講生に意識改善を生じさせる一助となっていることが確認された。まだ、初期段階の取り組みであり、明確な結果としては表出していないが、反転授業の可能性が示唆されたと考えており引き、続き検討していく予定である。

## 【参考文献】

藤吉正明, 畠山久, 永井正洋 大学初年次情報科目における反転授業の試行と評価, 日本教育工学会全国大会第30回講演論文集 CD-ROM, 297-298, 2014.

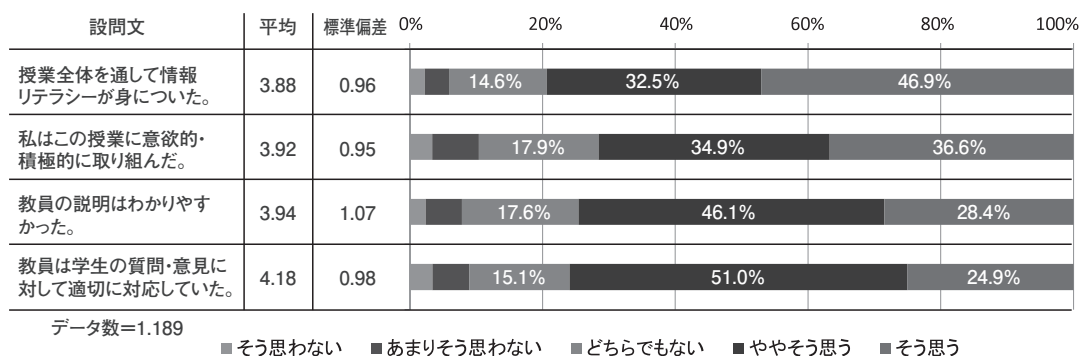


図1：授業評価アンケート（情報教育検討部会版）

# 実践英語教育

## 授業改善アンケート結果の検討とこれからの課題

英語教育分科会座長  
都市教養学部人文・社会系教授  
本間 猛

### 【はじめに】

本学の英語教育は2013年度から新たなカリキュラムを導入し、今年度は、2年目に当たる。新カリキュラムでは、従来通り統一教科書を使用するクラス（Bレベル）の他に、新たに、Aレベル（特に英語の運用能力の高い学生群）とCレベル（英語を初めて学ぶものを含め、特段の配慮が必要と思われる学生群）を設定し、レベル分けに応じた教材および教育方法を用いて、きめ細かい指導を目指している。クラスサイズは、Aレベルは約8名、Cレベルは約10名、Bレベルでも、約20名であり、少人数制となっている。

### 【個別質問事項について】

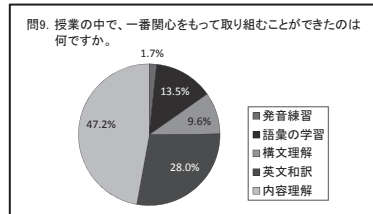
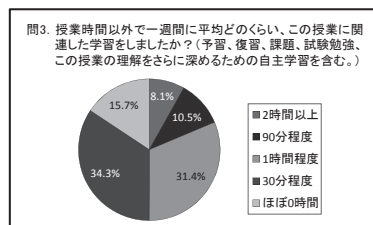
**統一教科書について** 統一教科書として用いた Mosaic 2 Reading は、大学教養レベルにふさわしい英語読解力を養成し、語彙力を増強するとともに、論理的な思考法を身につけることを目指している。また、内容も、大学生の知的好奇心を満足させるもので、言語と学習、ジェンダー、人間関係、美意識、交通、心理学、労働、歴史、芸術などの多彩なジャンルを含んでいる。

問8では、この教科書の難易度についてたずねている。その結果、「易しい」0.8%、「やや易しい」3.2%、

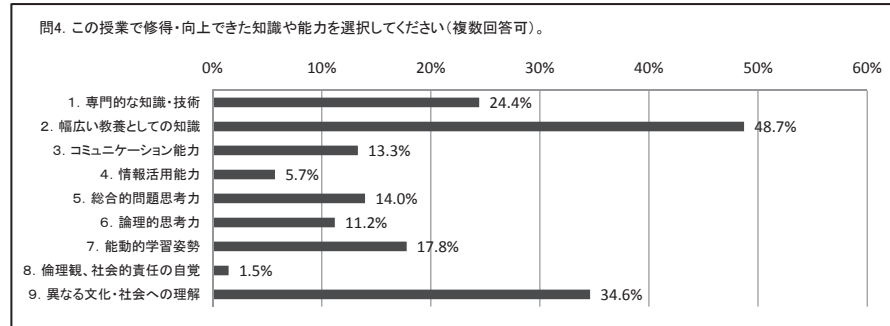
〈実施期間〉 平成26年7月9日(水)～平成26年7月22日(火)  
 〈履修登録者数〉 1,725人 〈回答者数〉 1,478人 〈回収率〉 85.7%  
 〈授業科目数〉 94クラス 〈実施科目数〉 90クラス 〈実施率〉 95.7%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.44	1.10	19.2%	28.8%	35.7%	10.1%	6.3%	
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.75	0.94	19.0%	50.1%	20.1%	8.5%	2.4%	
問8 今年度の統一教科書 Mosaic 2 Readingの難易度はどうでしたか。	2.44	0.75	0.8%	3.2%	45.4%	40.6%	10.0%	
問10 この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか。	3.71	1.05	22.6%	43.9%	20.1%	8.8%	4.5%	

データ数=1,478



■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない  
 (問8のみ)  
 ■5.易しい ■4.やや易しい ■3.ちょうどよい ■2.やや難しい ■1.難しい



「ちょうど良い」45.4%、「やや難しい」40.6%、「難しい」10.0%であった。半数弱(45.4%)の学生が「難易度は適切である」と評価している一方で、「(やや)難しい」も、ほぼ半数(50.6%)である。ちなみに、2011年度以降、教科書を「(やや)難しい」とした学生は、22.4%、4.9%、42.1%、50.6%と推移してきている。また、5段階評価(5:易しい、1:難しい)の平均値は、2008年度以降、2.78、3.28、3.14、2.93、3.53、2.55、2.44と推移している。教科書を「(やや)難しい」と評価した学生の割合からも、5段階評価の平均点からも、今年度の教科書は、昨年度を上回り、2008年度以降、もっとも難易度が高い教科書であったことになるようだ。ただし、2013年度より、新しいカリキュラムとなり、Aレベルおよび、Cレベルの学生は、統一教科書を使用しておらず、2013年度以前と直接比較できない。統一教科書の難易度については、毎年慎重に検討しており、このアンケート結果を踏まえ、次年度以降の教科書選定をする必要がある。

**【学生の関心】** 問9では、「授業の中で一番関心をもって取り組むことができたのは何か」とたずねている。結果は、「内容理解」47.2%、「英文和訳」28.0%、「語彙学習」13.5%、「構文理解」13.5%であった。昨年度の結果は、それぞれ、45.9%、25.8%、13.2%、12.5%であり、昨年度とほぼ同じで、例年通りであったと言える。

**【今後の学習との関わり】** 問10では「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」とたずねている。「そう思う」が、22.6%「ややそう思う」が43.9%で、これらを合わせると66.5%となっている。5段階評価(5:そう思う、1:そう思わない)の平均値は、2008年以降、今年度まで、3.19、3.14、3.28、3.41、3.31、3.68、3.71とおおむね上昇傾向で推移しており、今年度は最も高い評価を得た。これは、英語教員が一丸となって、学生のニーズをくみ上げてきた結果と言える。

### 【共通の質問事項について】

**【シラバスについて】** 問1では、「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習する上で役立つ内容だったか」とたずねている。結果は、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて、48.0%であり、「どちらでもない」も合わせれば、63.7%にのぼり、概ね好意的な評価を得ていると言える。ただし、実践英語Iは、必修科目であるので、他の科目群と共通の質問項目では、適切な答えが得られないのかも知れない。

**【授業の理解度】** 問2では、「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」かをたずねている。結果としては、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると69.1%(昨年度70.5%)となっており、大半の学生が授業を理解している。一方で、3割ほどの学生が、十分な理解を得られていない点も踏まえて、さらに多くの学生が英語力を身につけ、授業を理解できるようにする工夫をする必要がある。

**【学習時間】** 問3では「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか」とたずねている。「1時間程度」以下との回答が2011年度84%、2012年度87%、2013年度79.7%に対して、今年度は、81.4%となった。「90分程度」以上は18.6%である。また、「ほぼ0時間」という学生が15.7%(昨年度16.8%)もいる。これでは、高校までに身につけた英語力の維持もままならない。なんとかして、教室外学習を促し、英語力の向上を図りたい。そのための教員の側の工夫が求められている。

**【授業で得られるもの】** 問4では、「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答可で選択させている。特に、「幅広い教養としての知識」と「異なる文化・社会への理解」を選択する学生が多く、それぞれ、48.7%、34.6%である。これは、実践英語科目のシラバスに掲げられている目標の一つである「言語の背景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を拓げる」ことが、ある程度達成されたと言える。

### 【今後の課題と展望】

新たなカリキュラムによる授業の開始後、授業改善アンケートは、昨年度に次いで、2度目となる。昨年度とほぼ同じ傾向と言える。しかし、わずかながらとはいえ、確実に良い方向に向かっているようだ。

昨年度に引き続き、習熟度別クラス編成テストがTOEICによって行われるため、「実力をより客観的に把握できる」点を評価する学生が多いようだ。また、昨年度から期末試験としての統一試験をなくしたことにより、各教員がそれぞれのクラスに合わせて、柔軟に授業が運用できて良かったという意見も聞かれた。

今後は、新たなカリキュラムをよりよいものにし、充実した授業を行うことが必須である。特に、統一教科書の難易度を適切なものにし、授業の理解度を上げるための工夫を行い、授業外の学習をさらに促すことが課題である。

# 未修言語の授業改善アンケートについて

未修言語科目部会長  
都市教養学部人文・社会系准教授  
山本 潤

## 【はじめに】

本学では、大学入学後に基礎から学ぶ言語科目のことを、未修言語科目と呼称している。この科目は、学科により必修あるいは推奨となっている「第二群」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）と、自由選択科目となっている「第三群」（ロシア語・スペイン語・イタリア語・アラビア語・ギリシャ語・ラテン語）から構成されている。いずれも、資格習得や就職を視野に入れた実用的な語学力の獲得と、多様な言語を学ぶことを通して異文化と触れ合い、その理解を深め国際的な視野を育むことを学習の目的としている。また、近年本学では世界各地の大学と国際交流提携を推進し

ており、そうした大学への留学のために必要不可欠なものとして、未修言語科目は今後その重要性をより一層増していくものと思われる。なお、未修言語科目に関するアンケートは第二群の初級についてのみ行われた。

## 【個別の質問項目】

「学生による授業評価」の項目のうち、問8および問9は未修言語履修者向けの個別質問項目である。まず問8については、教員側が想定している授業レベルと受講者側の要求レベルのバランスは、言語習得上大きな意味を持ち、また言語によっては提供教室所属の教

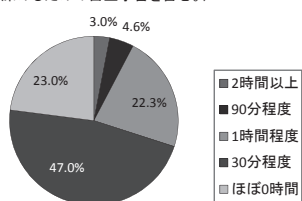
〈実施期間〉 平成26年1月9日(木)～平成26年1月27日(月)  
 〈履修登録者数〉 2,509人 〈回答者数〉 1,749人 〈回収率〉 69.7%  
 〈授業科目数〉 112クラス 〈実施科目数〉 101クラス 〈実施率〉 90.2%

設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.44	1.07		18.3%	27.8%	39.0%	9.0%	3.2%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.68	0.99		17.8%	49.6%	18.9%	10.5%	
問8 今年度の教科書の難易度はどうでしたか。	2.66	0.69	3.4%	0.7%	63.7%	25.1%	7.1%	3.1%
問9 この授業は、今後のあなたの言語学習に資するところがあった。	3.79	0.97		22.6%	46.3%	21.6%	6.4%	

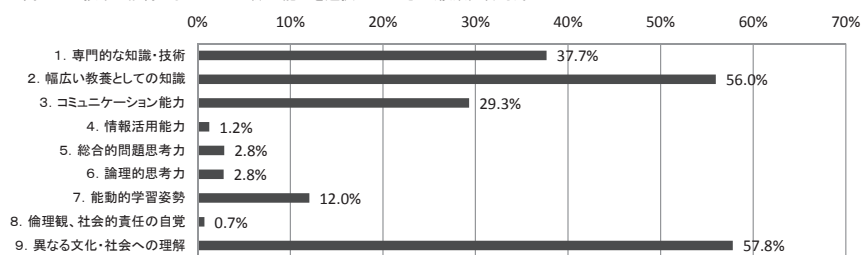
データ数=1,749

■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまり思わない ■1.そう思わない  
 (問8のみ)  
 ■5.易しい ■4.やや易しい ■3.ちょうどよい ■2.やや難しい ■1.難しい

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。)



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。





員の編纂した統一教科書を使用しているため、その内容の妥当性を確認するために設けた。問9は海外への留学などを視野に入れ、継続して学習を続けていくモチベーションを喚起するためのきっかけとなったかどうかを確認するための設問である。

問8での「教科書の難易度」については、「ちょうどよい」との回答が63.7%にのぼり、大方の授業において、妥当な教材選択および難易度設定が行われていたことを示している。ただし、前述のように統一教科書を使用している言語がある一方、各担当教員が教科書の選定を自由に行っている言語もあるため、この結果がすべての未修言語科目における一般化した結論といえるかどうかについては、留保を必要とする。より正確な実態把握を行うため、今後履修した言語名を問う設問を追加する予定である。

問9では「強くそう思う」と「そう思う」の合計が68.9%という高い水準に達している。今後の目標としては、「強くそう思う」の割合を増やしていくことであろう。

#### 【共通の質問項目の評価結果】

問1で問われた「シラバスの有用性」については、「そう思う」と「ややそう思う」の合計が46.1%で「あまり思わない」と「そう思わない」の14.8%を大きく上回ったものの、「どちらでもない」が39%と高い数値となった。シラバスの書き方に今一步の工夫が必要とされているといえるであろう。問2での授業の理解度に関する自己評価は、回答結果が前述の問9と非常に近いものになった。これは、授業での手ごたえがそのまま更なる言語学習へのモチベーションに直結していることを示している。

問3での、授業以外での学習時間が、週1時間程度までの割合が9割を超えているとの結果は、学習指導に大きな課題を突き付けるものである。未修言語を習得するためには、常に予習と復習、それに実践などを通し、なるべく長い時間その言語に触れていることが重要だが、この結果は大多数の受講者は授業外ではほとんどその機会を持たないことを示している。自宅での学習方法や言語に触れる機会の紹介など、多角的な指導の必要性を感じさせる結果である。

問4での、授業を通して得られた知識・能力として、「専門的な知識・技術」、「幅広い教養としての知識」、「異なる文化・社会への理解」がいずれも高いパーセンテージを示しており、未修言語科目の教育目的は大体にお

いて達成されているとみることが可能である。ただし、異言語を使用し、またその能力を伸ばすために必要不可欠な「コミュニケーション能力」が獲得できたとしている割合は僅かながらも30%を下回っており、指導の際の更なる工夫が求められる。

#### 【集計結果の経年変化】

未修言語科目でのアンケートは昨年度開始したばかりであり、しかも昨年と重なる設問は問8および問9のみであるが、ともに昨年度と有意の差は見られない。

#### 【全体的な傾向と今後の課題】

集計結果からは、全体として適切な指導が行われており、それに対して受講者も満足している傾向がうかがえる。しかし、未修言語の習得という観点からすれば、非常に大きな問題と言えるのが、自発的な学習意欲の低さと、それを向上させることができていないという現状である。この事実と併せ考えると、教科書の難易度に関しての6割を超えるちょうど良いという評価も、学習指導上そのまま肯定的な回答と解釈してよいのかどうかという点に疑問が残る。自発的な予習・復習の必要性を感じさせない程度の難易度とは、場合によっては「易すぎる」と見なす必要があるのではないだろうか。受講者の言語理解の深化はもちろんのこと、言語習得を発展的な学習意欲および知的好奇心の促進へとつなげていくことは、今後の大きな課題である。

# 理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果について その現状とアンケートの活用方法

理工学系 FD 委員会委員長  
都市教養学部理工学系生命科学コース教授  
林 文男

## 【理系共通基礎科目の目的・目標】

理系共通基礎科目は、数理科学関係、物理学関係、化学関係、生命科学関係、電気電子工学関係、機械工学関係の6分野から、全学部学生を対象に、一般教養の自然科学系の授業として開講されている。理系共通基礎科目として2014年度前期に開講された科目は、微分積分I、線形代数I、微分積分III、線形代数III、解析入門I、離散数学入門、基礎微分積分B、基礎線形代数A、教養基礎物理I、初等物理I、専門基礎物理I、物理学概説I、物理通論I、化学概説I、一般化学I、一般生物学I、生物学概説IA、工学系電磁気学、工学系

電気回路、電気数学、材料の力学第二B、工業の力学B、機械の力学Bであり、これらが今回のアンケートの対象となっている。

## 【理系共通基礎科目独自の質問の選定と評価結果】

科目群独自の質問として、受講者数、授業環境、授業テーマに関する以下の3項目を選定し、66の授業科目4,798人の受講者のうち、57科目3,212人から回答がよせられた（回収率66.9%）。

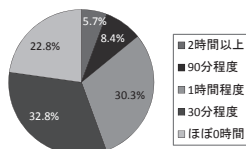
問8 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

〈実施期間〉 平成26年7月9日(水)～平成26年7月22日(火)  
 〈履修登録者数〉 4,798人 〈回答者数〉 3,212人 〈回収率〉 66.9%  
 〈授業科目数〉 66クラス 〈実施科目数〉 57クラス 〈実施率〉 86.4%

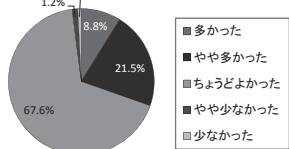
設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.44	1.03		16.7%	29.0%	40.6%	8.6%	5.1%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.27	1.11		12.3%	34.1%	29.5%	16.5%	7.6%
問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。	3.00	1.10		8.9%	23.9%	35.6%	21.7%	10.0%
問10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。	3.33	1.06		14.3%	29.3%	38.6%	11.2%	6.6%

データ数=3,212

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。)

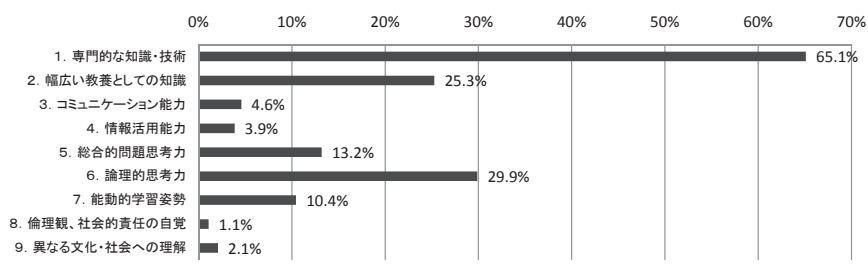


問8. 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？



■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない

問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



問9 快適な環境下でこの授業を受けることができた。

問10 この授業テーマは自分の関心にあっていた。

問8のクラスの人数については、ちょうどよかったという意見が67.6%と最も多く、やや多かったという意見と多かったという意見が30.3%となっていた。問9の授業環境については、快適あるいはとくに問題がないと感じた学生が71.4%と多かったが、およそ4人に1人が快適とはいえないと回答している。問10の授業テーマに対する関心については、5、6人に1人が自分の関心には合わなかったようだ。

### 【共通の質問項目の評価結果】

共通の質問項目は以下のように設定されている。

問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。

問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。

問3 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか。

問4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択して下さい。

問1のシラバスについては、およそ半数(45.7%)の学生が授業の選択や学習に役立ったようだ。問2の理解度については、およそ4人に1人がよく理解できたとは言えないと回答している。問3の学習時間については、一週間に30分程度から1時間程度の学生がもっとも多く、全体の63.1%を占めていた。しかし、およそ4人に1人はまったく授業時間外に学習していない(ほぼ0時間)。問4の修得技能については、専門的な知識や技術、あるいは理論的思考力が多くなっているが、これは理系の授業としての特徴と言える。

### 【集計結果の経年変化に関する所見】

一昨年より質問項目が大きく変更されたため、経年変化を追える項目が減ってしまったが、理系共通基礎科目では、独自質問である問9と問10についてのみ2008年からの比較を行うことができる(いずれも前期)。問9の授業環境については、平均値が2008年に3.15、2009年に3.24、2010年に2.99、2011年に3.07、2012年に3.17、2013年に3.22、そして今回が3.00と、毎年ほぼ同じ値となっている。問10の授業テーマについては、平均値が2008年に3.15、2009年に3.18、2010年に3.17、2011年に3.24、2012年に3.24、2013年度に3.32、そして今回が3.33と、わずかでは

あるが増加傾向にあり、学生の関心をひく授業が行われるようになってきたと考えられる。

### 【今後の改善に向けた課題】

授業評価から授業改善のためのアンケートに切り替わった一昨年度より、自由に記述できる問5から問7が、教員と学生の間を橋渡しとして大きな意義をもつようになった。問5では、授業の良かった点(とくに教員の工夫など)が指摘できるようになり、問6では、逆に改善点を指摘し、具体的な改善策を提案することもできるようになっている。問7ではさらに広く意見を記述することができ、大学全体のカリキュラムや教室などの設備に対する要望も書き込める。これらの欄を建設的な意見で埋めることによって、学生から教員へ、それを受けて教員の授業改善へと結びつくことを期待したい。学生は、ぜひこの欄を白紙で提出することなく、活用して欲しい。

理系共通基礎科目は、高校生のときにそうした科目をあまり学習しなかった学生からは敬遠されがちであろう。しかし、教員は、そのことを充分認識した上で、だれにも興味を持ってもらえるように工夫を凝らして授業を行っているはずである。少なくとも意識はそうである。それでも至らない場合があるかも知れない。そう思ったら、問5から問7へ書き込みをして欲しい。それらは、確実に教員に伝わるしくみになっており、それによって授業は改善されていくものである。

# 教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目群検討部会長  
都市教養学部人文・社会系教授  
高岸 冬詩

## 【はじめに】

昨年度、全学共通科目が再体系化され、旧都市教養プログラムから移行した教養・基盤科目群は、今年度で2年目となりました。教養科目群は、各テーマの知識修得を通して、社会人に必要な幅広い教養を身につけ、総合的思考力と問題解決能力の養成を目指しています。基盤科目群は、各領域の学問形成に不可欠な基礎的知識と能力の修得により、専門分野の学習の基盤を固め、専門領域外の知識や思考法も学び視野を広げる、という目標を掲げています。この両科目群に対して2014年度前期に実施した、授業アンケート結果の概要を報告します。

まずアンケートは、2014年度前期に開講された92クラス中、79クラスで実施し（2013年度は、96クラス中80クラス）、履修登録者数13,254人中、7,049人から回答を得ました。回収率は53.2%で、昨年度前期の46.2%から7%アップしたのは好ましい傾向です。ただ、それでも半数をようやく越えたに過ぎないので、さらに高い回収率を目指して取り組んでいくことが必要です。

## 【質問項目とその評価結果および所見】

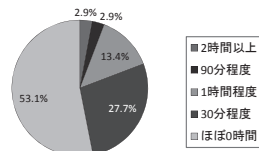
教養・基盤科目群に個別に設定された質問項目は、次頁の3問です。

〈実施期間〉 平成26年7月9日(水)～平成26年7月22日(火)  
 〈履修登録者数〉 13,254人 〈回答者数〉 7,049人 〈回収率〉 53.2%  
 〈授業科目数〉 92クラス 〈実施科目数〉 79クラス 〈実施率〉 85.9%

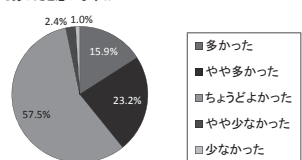
設問文	平均	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.69	1.02		23.0%	37.4%	28.8%	7.2%	3.6%
問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.57	1.02		16.4%	43.7%	24.6%	11.4%	3.9%
問8 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？	2.64	0.79	2.1%	4.3%	59.0%	25.2%	9.4%	
問9 この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？	3.77	0.96		21.5%	46.0%	23.6%	5.6%	3.2%

データ数=7,049

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？(予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主学習を含む。)



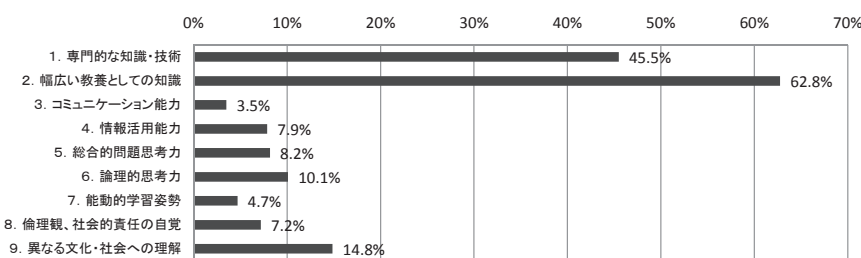
問10. 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうかと思いますか？



■5.そう思う ■4.ややそう思う ■3.どちらでもない ■2.あまりそう思わない ■1.そう思わない

(問8のみ)  
 ■5.易しかった ■4.やや易しかった ■3.ちょうどよかった ■2.やや難しかった ■1.難しかった

問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください(複数回答可)。



問8 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

問9 この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？

問10 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

これらの個別質問項目と、問1～問4の共通質問項目への回答の評価結果をとりあげ、経年変化や今後の課題についての所見を述べたいと思います。

まず共通項目の問1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった」という、シラバスの有用性への質問の回答平均は、昨年度の3.65を上回る3.69（5が最高評価）で、年々着実に上がってきています。「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」を合計した数値は39.6%で、昨年の41.6%を下回りましたが、今後も、シラバスが学生にとってさらに有益なものとなるよう、改善していく必要があります。

次に、共通項目の問2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」という質問と、個別項目問8の授業の難易度を尋ねた質問の結果をみてみます。

問2の回答平均は3.57（昨年3.52）、問8の回答平均は2.64（昨年2.66）で、いずれも昨年とほぼ変わらない数値と読み取れます。問8の難易度について、「ちょうどよかった」の比率が59.0%（昨年59.3%）、「やや易しかった」の4.3%（昨年4.7%）と「やや難しかった」の25.2%（昨年25.5%）を加えると88.5%（昨年89.5%）で、昨年度前期から1ポイント下がったものの、概ね適切な難易度であったと評価できるでしょう。

昨年のレポートでも指摘がありました、難易度と理解度のギャップについては、問8で授業の難易度が「ちょうどよかった」から「易しかった」と答えた学生の割合65.4%（昨年65.8%）と、授業を理解できたかを尋ねた問2で、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の割合60.1%（昨年58.5%）の差が、昨年度の7.3%と比べて、5.3%と小さくなっています。この数値を実際にどう読むかは難しいところですが、授業の理解度の値が僅かでも上がっているのは、好ましいことです。

共通項目の問3「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？」と

いう質問に、「ほぼ0時間」と回答した割合は53.1%でした。昨年の58.1%から5%下がり、学習時間1時間程度からそれ以上を合計した数字を比べると、昨年の18.8%から19.2%に上がりました。つまり、授業と関連した学習時間が全体的に若干増えていることがうかがえます。しかし、「ほぼ0時間」が依然5割を超えている現状は望ましいものではありません。授業が理解できればそれで終わりというのではなく、授業で学んだことを自主学習でさらに深めていくことは大切ですが、その作業を半数以上の人が行っていないこととなります。この問題は全体的傾向と思われますが、当科目群でも、学生の皆さんに授業から発展的な学習へとつなげてもらえるよう、工夫する必要があるでしょう。

共通項目の問4「この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください」では、「幅広い教養としての知識」（62.8%、昨年64.4%）、「専門的な知識・技術」（45.5%、昨年42.6%）がそれぞれ1位、2位となります。また、授業により視野が広がったと思うか？という、個別項目の問9では、67.5%の学生が「そう思う」または「ややそう思う」と回答し、回答平均値も3.77で、ほぼ例年並みの値でした。

最後に、クラス人数についての問10への回答結果では、「ちょうどよかった」が57.5%と6割近くを占めた反面、15.9%が「多かった」（昨年15.0%）、23.2%が「やや多かった」（昨年20.1%）と回答し、ほぼ4割がクラス人数の多さを意識していたことが分かりました。自由記述でも、「人数が多すぎる」「人数の割に教室が狭い」等、不満回答の目立つ授業が見受けられ、立ち見学生が出てしまった事例も報告されています。

#### 【今後の課題への取り組み】

アンケートの問10でも明らかになったように、当科目群のいくつかの授業で、受講者集中の弊害が顕在化しています。教養・基盤科目群検討部会では今年度その対策に着手し、履修者数が400名を超えた授業については、翌年度より履修者数の上限を設定することとしました。この措置によって、来年度は教室から受講生が溢れる事態を防止することができるのではと期待しています。次回のアンケート結果を注視しつつ、更なる授業環境の改善に取り組んでいきたいと考えています。